春から始める ハエ対策について（令和４年４月発行）

サシバエの発生は、乳牛にストレスを与え、乳量の低下や育成牛の増体の遅れなど生産性にも影響すると言われています。

サシバエは涼しくなった９月頃に活動が活発化しますが、春先からの対策により、秋以降の発生を抑えることができます。

１.ハエのライフサイクル

ハエは羽化の翌日から交尾、３日後から産卵が可能で、１回に 50～150 個、一生に約 500 個を産卵します（図１）。卵から成虫までのライフサイクルは 20℃では約３週間ですが、25℃では約２週間、30℃では約１週間と温度が高くなるにつれ、ライフサイクルが早まります（表１）。

このことから、ハエが急増する夏を迎える前からの対策が大切です。

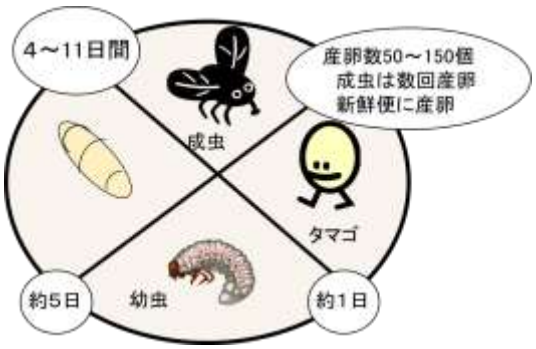

図１　ハエのライフサイクル

表１　温度と発育速度の関係

温度	卵から成虫までの発育期間（日）
16℃	36～42
20℃	18～21
25℃	11～13（約２週間）
30℃	8～10（約１週間）
35℃	6～8

住化エンバイロメンタルサイエンス株式会社
講習会資料より※都市と廃棄物 Vol.23.No.12

気温が上昇する夏にハエは急増！
春先からの対策でハエの絶対数を抑制する！

２.ハエはもとから絶たなきゃだめ!?

ハエの成虫は全体の約 20%で、残りの 80%は、さなぎや幼虫、卵です。

そのため、成虫対策だけではハエの発生サイクルを止めることは難しく、卵・幼虫・さなぎからの総合防除対策が重要となります。

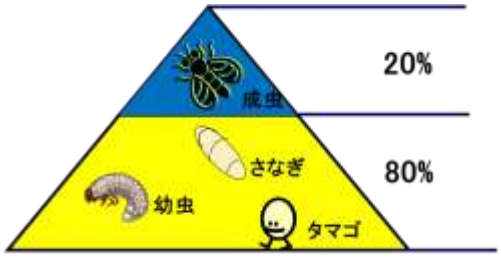

図２「成虫」:「卵・幼虫・さなぎ」=２：８

３.ハエの防除対策について

ハエ対策の方法について、以下の通りまとめてみました。

（１）ハエの住処をつくらない（環境整備）

家畜の糞便や堆肥、ジメジメした環境がサシバエの発生場所。

こまめな除糞、水や飼料がこぼれた場所の掃除、泥ねい化防止などの環境整備が基本。

また、吸血したサシバエは牛舎周辺の雑草を休憩場所として移動するため、敷地内の雑草管理も大事。

写真１　泥濘化（写真左）を防ぎ、乾いた環境（写真右）を保つことが大事

（２）物理的な対策

ハエ取り紙を使う（写真２）、ハエをたたくなど。

（３）化学的対策（殺虫剤の利用）

成虫に散布するタイプ、幼虫に使用するタイプなどがある。

ハエの絶対数を減らすためには、幼虫対策を行った上で、成虫を駆除する総合防除対策が効果的。

写真２ ハエ取り紙を使った成虫駆除対策

４.年間の防除スケジュール

図３にハエ防除の年間スケジュール例を掲載しましたので、ハエ防除対策の参考にしてください。

ハエ対策のスタートの季節、春はすでに始まっています！ハエのライフサイクルを絶つ総合駆除を行い、ハエによる目に見えない損失を防ぎましょう。

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月
ハエ発生時期		↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
幼虫剤								
成虫剤								
誘引殺虫								
環境整備								

図３　ハエ防除の年間スケジュール（例）

写真３　幼虫剤散布の様子
※牛が踏まない壁際に多く生息するため、壁際を念入りに散布

【薬剤の一例】

幼虫剤：サイクラーテ SG、シロマジン、ヨモベットなど
- バーンクリーナーに播き、ハエの発生源である堆肥場で効果を発揮
- ハッチ周りの水やエサがこぼれた場所に定期的に散布

成虫剤：フロムエイト、バイオフライ、トヨダンなど
- 希釈した薬剤を空間噴霧する、虫に向けて噴霧する。

誘引殺虫：エコスピード、ノックベイトなど
- ハエの集まる壁や柱にハケやスプレーで塗布
- ハエが集まる場所に薬剤を設置

写真４　誘引殺虫剤の設置

****注意****

・殺虫剤使用の際は、用法・用量、使用上の注意点をよく読み、適正にお使いください。

・規定より少ない薬剤量の使用はハエに薬剤耐性がつく危険性があるので、規定の使用量を使いましょう。

・同一種類の薬剤を長年使い続けると、ハエに薬剤耐性がつく可能性があります。数年に１回、薬剤の種類を変えるなどローテーションを検討しましょう。

ハエの発生源を減らす環境整備
＆ ハエのライフサイクルを絶つための総合駆除

ハエの絶対数を減らそう

宗谷農業改良普及センター（R4．４）